2021年西南学院史資料センター企画展

波多野培根
同志社と西南学院を支えた教育者

The Educator Hatano Masune

波多野培根 同志社と西南学院を支えた教育者

学校法人 西南学院

ご あ い さ つ

西南学院史資料センターは、学院創立百周年にあたる 2016 年に開設されて以来、創立者 C. K. ドージャー並びに学院関係者の事跡およびその歴史を明らかにし、建学の精神を継承することを目的として、資料の収集、調査、研究、およびそれらに基づく展示会など様々な活動を行ってまいりました。

今回の展示会は、戦前の学院の教育を担った波多野培根（1868-1945）の足跡を振り返るものです。彼が没した 11 月 7 日は「波多野培根先生記念日」として覚えられていますが、学院の学年暦に特に名前を挙げて記念日が設けられているのは、創立者の C. K. ドージャーと波多野培根のみで、このことからも波多野が教育者として学生や教職員に及ぼした感化の大きさが偲ばれます。

周知のとおり、日本の近代化は欧米と肩を並べるために、その文明を我が国に取り入れようと模索した歴史でした。そしてその摂取の仕方は「和魂洋才」という標語が示しているように、精神文化よりも科学技術や国家制度の面に重点が置かれました。そのような中で、欧米文化の精神的支柱であるキリスト教を日本の精神風土にもたらすために、教育の分野において尽力した多くの人々がいました。波多野の生没年はまさにそのような日本の近代化の歴史を象徴するかのようです。実際、儒学者の父をもち、彼自身陽明学を学ぶことから出発した波多野が、同志社において新島襄の感化を受けてキリスト教を受容し、信仰者として教育に携わる中で深めた思索は、日本が近代化する中で、従来の日本の思想的土壌にキリスト教を受容し扶植しようとした、その試みの重要な一例と言えるでしょう。

本展示会の開催にあたっては、西南学院大学博物館の協力のもと、学院内の資料だけでなく、同志社大学同志社社史資料センターからも資料をご提供頂きました。末筆ではございますが、ご協力を賜りました皆様に心より御礼申し上げます。

2021 年 3 月 1 日

西南学院史資料センター長
今井尚生

開　催　概　要

波多野培根（1868–1945）は、明治後期から第二次世界大戦期までの日本における教育・伝道を支えたキリスト者の一人である。同志社の創立者新島襄の高弟であった波多野は、同志社をはじめとする日本各地での教育・伝道活動を経て、53 歳の時に西南学院へ赴任してきた。以後、約 24 年間にわたって西南学院の教育を支え続け、学院の歴史に重要な足跡を遺した。

波多野培根の思想は儒教（とりわけ陽明学）に深い影響を受けつつも、キリスト教信仰（とりわけプロテスタンティズム）をゆるぎない土台としており、波多野自身の生き方としても貫かれていた。その人生を評して、波多野培根研究に尽力した村上寅次は「一貫してキリストに対する節操において忠実ならんとした一キリスト者の毅然たる生涯」と述べている。かくのごとき波多野の思想と生き方は、その教育を通じて同志社と西南学院の学生たちに継承され、今日にまで伝えられている。

本展示会では、同志社と西南学院という二つのキリスト教主義学校の教育を支えた波多野培根について、その生涯と思想を紹介する。

会期　2021 年 3 月 1 日（月）～ 2021 年 5 月 31 日（月）
会場　西南学院百年館（松緑館）1 階企画展示室
主催　西南学院史資料センター
協力　同志社大学同志社社史資料センター、西南学院大学博物館、西南学院大学図書館

目　次

ごあいさつ

開催概要　1

目次・凡例　2

第 1 章　同志社と波多野培根　3

第 2 章　西南学院と波多野培根　8

波多野培根略年表　16

西南メモリアル・コラム　18

解説

同志社と西南学院を繋ぐ――自校史研究としての波多野培根研究、その一つの展望

西南学院大学博物館学芸員 下園知弥　19

出品目録

凡　例

◎本図録は 2021 年西南学院史資料センター企画展「波多野培根 同志社と西南学院を支えた教育者」［会期：2021 年 3 月 1 日（月）～ 5 月 31 日（月）］開催にあたり作成したものである。

◎図録の資料番号は、展示の都合上、展示順番とは必ずしも一致しない。

◎各資料には、資料名（和英表記）のほか、資料情報として［制作年／制作・出版地／制作者・出版社／素材・形態／所蔵］を記載している。法量に関しては巻末の出品目録に記載した。

◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することは認めない。

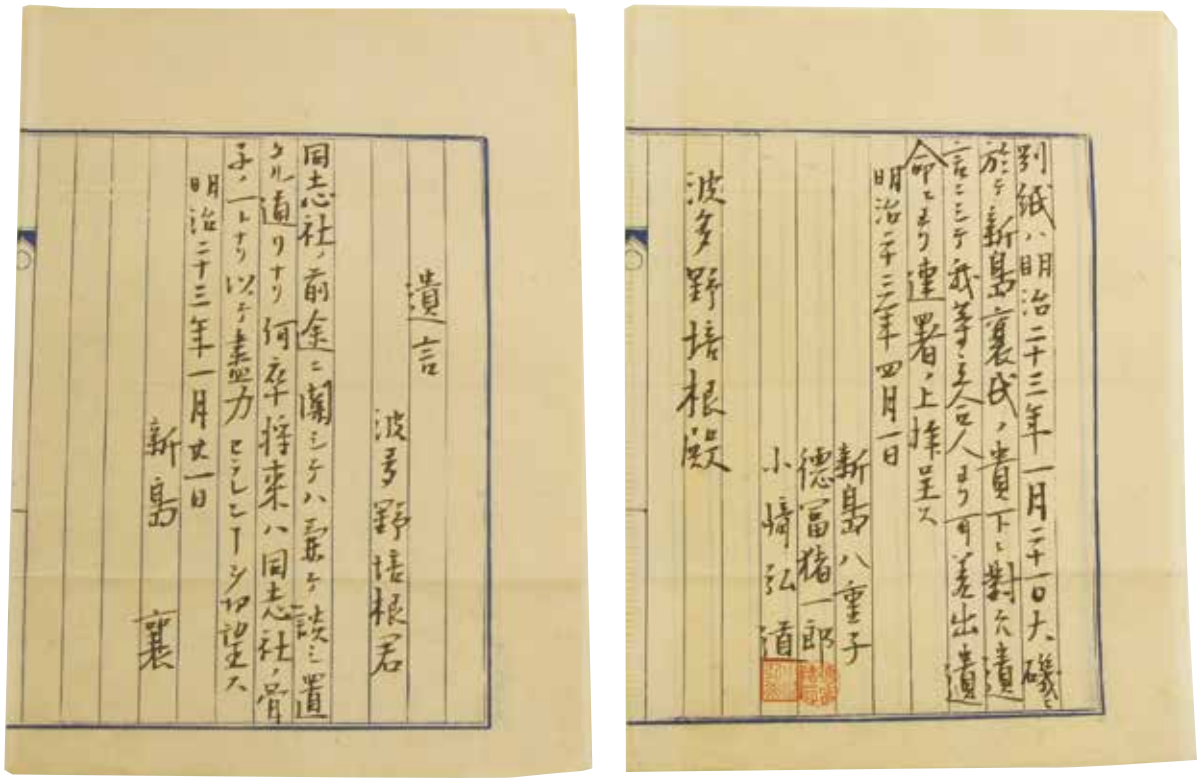
◎本図録の監修は西南学院史資料センター事務室がおこない、編集は下園知弥（西南学院大学博物館学芸員）がおこなった。また、編集補助には、内野舞衣（西南学院大学博物館学芸調査員）、相江なぎさ（同）があたった。

第1章　同志社と波多野培根

津和野藩士の波多野達枝と咸（皆子）の間に長男として生まれた波多野培根は、儒学教師である父の教育を受け、陽明学者東崇一（澤瀉）の主催する澤瀉塾に通うなど、幼少より儒教の教えの中で育った。波多野がキリスト教の道に入るのは、同志社英学校（後の同志社大学）入学後のことである。同志社在学中に新島襄の薫陶を受け、宣教師ラーネッドより洗礼を受けた波多野は、儒教とキリスト教を自身の精神的な柱としながら、教育者としての道を歩んでいくことになる。

波多野は生涯で二度、同志社の教員を務めており、同志社を離れていた時期――各地の伝道に従事していた時期や西南学院に赴任していた時期――も常に同志社のことを気にかけていたと言われている。波多野にとって同志社は、いわば教育人生における故郷であった。

本章では、教育者・波多野培根の生涯の前半期にあたる「同志社時代」について、同志社と西南学院に遺されている資料と共に紹介する。


遺言
波多野培根君
同志社ノ前途ニ関シテハ兼テ談シ置タル通リナリ、何卒将来ハ同志社ノ骨子ノ一トナリ以テ尽力セラレン事ヲ切望ス
明治二十三年一月廿一日
新島襄

別紙ハ明治二十三年一月二十日大磯ニ於テ新島襄氏ノ貴下ヘ對シ遺言ニシテ我等三人ヨリ有之出遺命ニヨリ連署ノ上差呈ス
明治二十三年四月一日
新島八重子
徳富猪一郎
小崎弘道
波多野培根殿

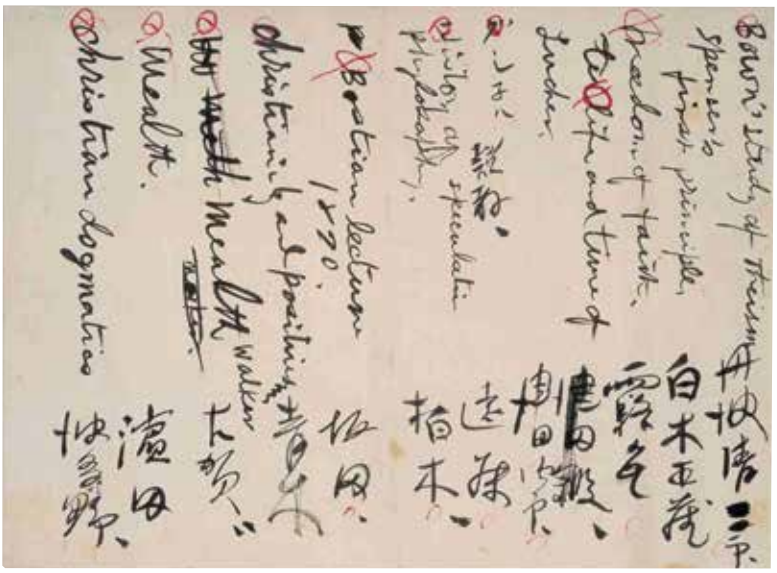
1.

波多野培根宛遺言（新島八重等連署認書）＊複製展示

Will of Niijima Jo to Hatano Masune

1890（明治23）年／日本／新島襄（代筆）／毛筆・和紙２枚・封筒付／同志社大学同志社社史資料センター

本資料は、新島襄から波多野培根に宛てられた遺言書である。書面には「同志社ノ前途ニ関シテハ兼テ談シ置タル通リナリ、何卒将来ハ同志社ノ骨子ノ一トナリ以テ尽力セラレン事ヲ切望ス」と記されており、当時まだ学生であった波多野に対して新島襄がいかに期待していたかがうかがえる。この遺言に基づいて、波多野は同志社に教員として迎え入れられ、教育者としての道を歩むこととなった。



2.

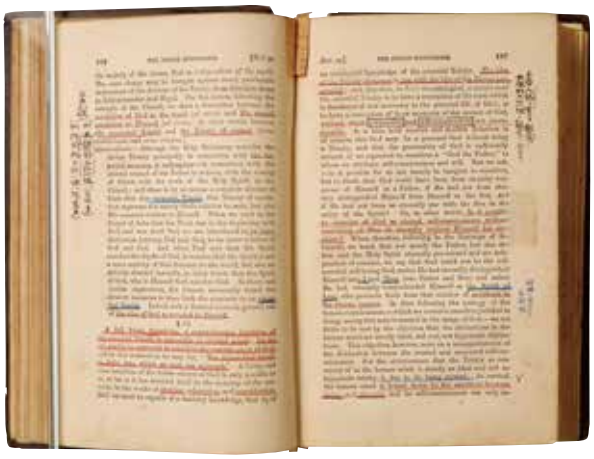
新島先生蔵書形見分書籍目録

＊複製展示

Relics list of Niijima Jo

執筆年不詳（1890〔明治 23〕年以前）／日本／青木要吉（控）／和文・英文・毛筆・和紙 11 枚／同志社大学同志社社史資料センター

新島襄の死後、その蔵書の一部は新島の友人・門下たちに「形見分」として分配されることとなった。波多野にはデンマークの神学者ハンス・ラッセン・マルテンセンの著書 *Christian Dogmatics* が贈られる予定であったことが本資料よりわかる（資料左端参照）。



3.

波多野培根旧蔵書 *Christian Dogmatics*

Christian Dogmatics owned by Hatano Masune

1874（明治 7）年／イギリス／ハンス・ラッセン・マルテンセン著、T&T Clark ／書冊／西南学院大学図書館（波多野文庫）

波多野に形見分として贈られた新島襄の旧蔵書。遊び紙に筆で「波多野培根 明治廿三年七月初旬 新島襄先生未亡人ヨリ贈與セラル」と記されている。また、筆書きの上には鉛筆で Joseph H. Neesima Kioto Japan と記されており、この署名は新島襄のものであると考えられる。本資料を含む波多野培根の旧蔵書は、現在、「波多野文庫」として西南学院大学図書館に収蔵されている。

4.

新島先生の生涯の意義

The significant of the life of Niijima Jo

1940（昭和 15）年／日本／波多野培根著、同志社／印刷・洋紙・洋綴／西南学院史資料センター

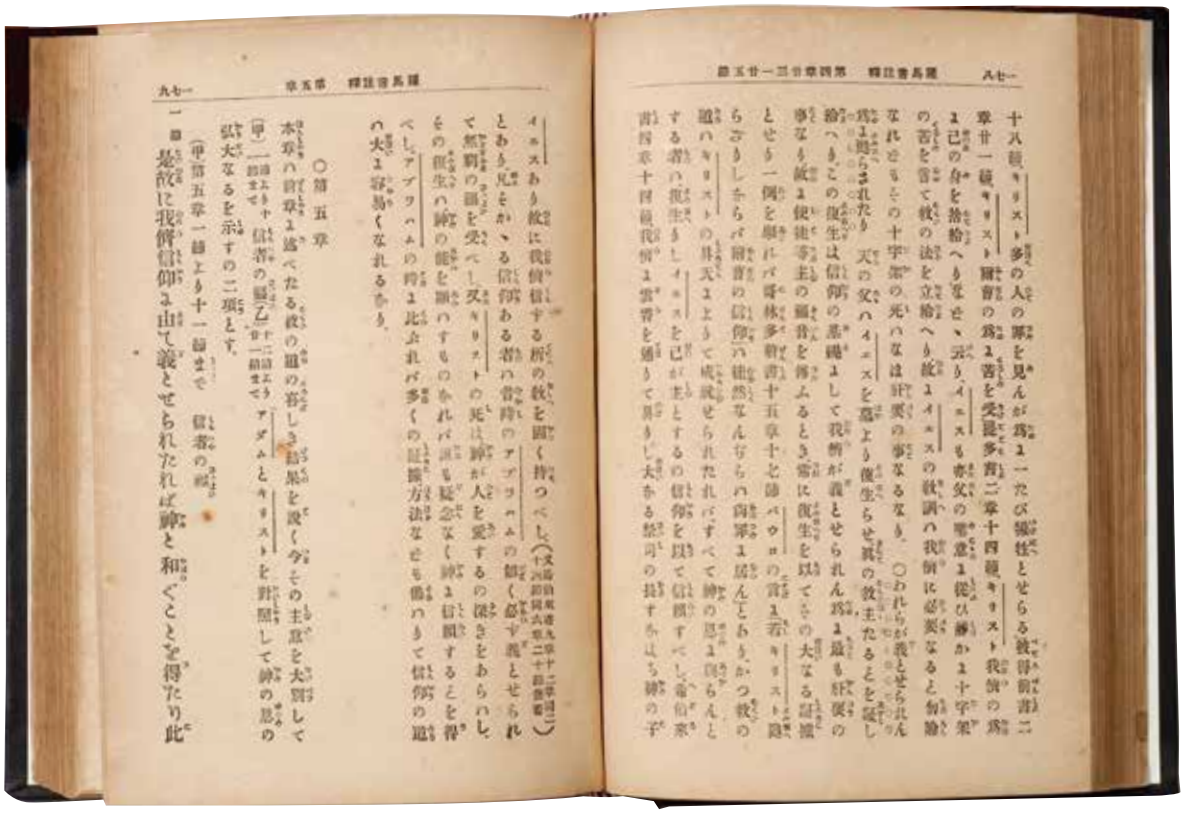
5.

同志社新報 第四十四号

Doshisha news vol. 44

1940（昭和 15）年／日本／同志社／新聞／西南学院史資料センター

資料４と５は波多野培根が執筆した『新島先生の生涯の意義』を掲載した小冊子・新聞である。この論文では波多野の思想の中心的主題の一つである「基督教と愛国」の問題も扱われており、キリスト教教育によって国の救済を目指すことが新島襄の終生の目的であったと波多野は考察している。本文中の「先生は熱烈なる愛国者である。然れども、普通の愛国者ではない。先生は、基督教の信仰に由りて聖化せられたる愛国者である。先生を新日本の精神教育の木鐸たらしめたるものは、彼の信仰である」という言葉は、上記の波多野の立場を象徴するものであると言えよう。



6.

ラーネッド講述「羅馬書註釋（ろましょ）」

Learned's *Commentary on the Epistle to the Romans*

1892（明治 25）年／日本／ D. W. ラーネッド著、福音社／書冊／西南学院大学図書館

波多野に洗礼を授けた人物は、アメリカン･ボードの宣教師であり同志社の教員でもあったD. W. ラーネッドである。アメリカン･ボードとは、1810 年に設立されたプロテスタントの海外伝道協会であり、日本伝道にも多くの信仰者たちが従事していた。その中の一人であったラーネッドは、1875（明治 8）年に来日して、その翌年から約 52 年間にわたって同志社の教育に尽力し続けた。本資料は、ラーネッドが講述した一連の聖書註解の一つである。

新島襄・ラーネッド・波多野培根

新島襄と波多野培根の間には、波多野が同志社生であったごく短い期間の交流しかなかったが、二人は強い信頼関係で結ばれていた。その事実は、新島の側からは波多野宛の遺言書（資料1）が証しており、波多野の側からは『新島先生の生涯の意義』（資料4と5）や、新島への恩義を示唆するいくつかの漢詩――そのうちの一つは同志社社史資料センターに収蔵されている写真資料《七言絶句「師恩海獄以何酬…」》である――が証している。

キリスト教信仰あるいはキリスト教教育という点では新島襄を深く尊敬していた波多野であったが、学問という点では、別の人物たちをより深く尊敬していた。そのうちの一人は、波多野に洗礼を授けたD.W.ラーネッドである。波多野は『同志社校友同窓会報増刊号――ラルネッド博士送別記念誌』（1928〔昭和3〕年）において、「聖書学の普及と進歩の上に、抜群の功績を建てたる二人の学者」として内村鑑三とラーネッドの名前を挙げている。波多野培根は新島襄門下として語られることの多い人物であるが、ラーネッドの教え子でもあったという事実も見落としてはならないだろう。

7.

『眞道指針』

Guideline of Truth

1893（明治 26）年／日本／波多野培根著、
大阪福音社／書冊／西南学院史資料センター

本資料は、波多野が同志社を退職した翌年、各地の伝道に従事していた時代に発刊された著作である。波多野は本著作の緒言において、「道理」を究めることに専心する現代の学問に警鐘を鳴らし、「万代に亘つて朽ちず、易らざるの眞理、人を正義と生命と喜樂と幸福に導く唯一の眞道の指針」を求めることの重要性を強調している。

8.

「韓国合併」非難の公開状

Condemnation for invading union with Korea

1910（明治 43）年／日本／波多野培根／巻子・桐箱付／西南学院史資料センター

伝道を志して 1892（明治 25）年に同志社を退職した波多野は、日本各地の伝道・教育に携わったのち、1904（明治 37）年に同志社へ復職する。その後はさまざまな役職を経ながら 1918（大正 7）年まで同志社の教育に従事した。本資料は、この第二期同志社時代に著わされた文書であり、1910（明治 43）年の日本帝国政府による韓国併合という侵略行為を正義なき「国家の禍機」として鋭く批判している。

第2章　西南学院と波多野培根

1916（大正5）年に創立した私立西南学院は、1918（大正7）年に西新町へ校地を移転した。1920（大正9）年には現存する西南学院最古の建築物である西南学院旧本館・講堂（現大学博物館）が着工されたが、この年は奇しくも波多野培根が西南学院に赴任してきた年でもあった。したがって、1920年は西南学院史にとって二重の意味で重要な年であるといえる。

西南学院の創立者C. K. ドージャーの招きを受けて同学院に赴任してきた波多野は、以後約24年間にわたって教鞭を執り続けた。同時代は日本が世界大戦の渦中に突き進んでいった時期でもあり、独善的な愛国教育が国内に蔓延していた。このような時代状況の中、同志社時代より愛国の問題を考え続けていた波多野は、1944（昭和19）年に「基督と愛国」と題する記念講演を行う。国家と国民の在るべき姿を説いたこの講演の翌年、日本の終戦を見届けたのちに、波多野はその生涯を終えた。

本章では、教育者・波多野培根の生涯の後半期にあたる「西南学院時代」を、西南学院史資料センターの所蔵資料と共に紹介する。

9-1.

波多野培根（53歳、着任当時）

Portrait of Hatano Masune (at the age of 53)

1920（大正9）年／日本／西南学院／写真／
西南学院史資料センター

9-2.

波多野培根（73歳頃）

Portrait of Hatano Masune (at the age of about 73)

1940（昭和15）年頃／日本／西南学院／写真／
西南学院史資料センター

村上寅次による人物対照図

9-3. **（上）**

授業前の祈祷

Scene of prayer before the class

1925（大正 14）年／日本／西南学院／写真／
西南学院史資料センター

＊中央の和服姿の教師が波多野培根

9-4. **（下）**

ドージャーが院長を辞任した年の高等学部教員

Portrait of high school teachers

1929（昭和 4）年／日本／西南学院／写真／
西南学院史資料センター

＊手前の列の左から三番目の私服姿の教師が波多野培根

10.

無迹庵（むせきあん）日誌

Musekian-Nisshi (Diary of Hatano Masune)

1930–45（昭和 5–20）年／日本／波多野培根／書冊（全 4 冊）／西南学院史資料センター

波多野が 1930（昭和 5）年から没年である 1945（昭和 20）年までの期間に記した日記。西南学院時代の波多野は、学院の要職には就かず、粛々と日々の学問・教育に勉めていたと言われている。自らを「無迹庵」――「何も誇るところのない場所」の意――と称し、控え目で堅実な実生活を貫いた波多野は、まさに節制の徳の持ち主であったと言えよう。

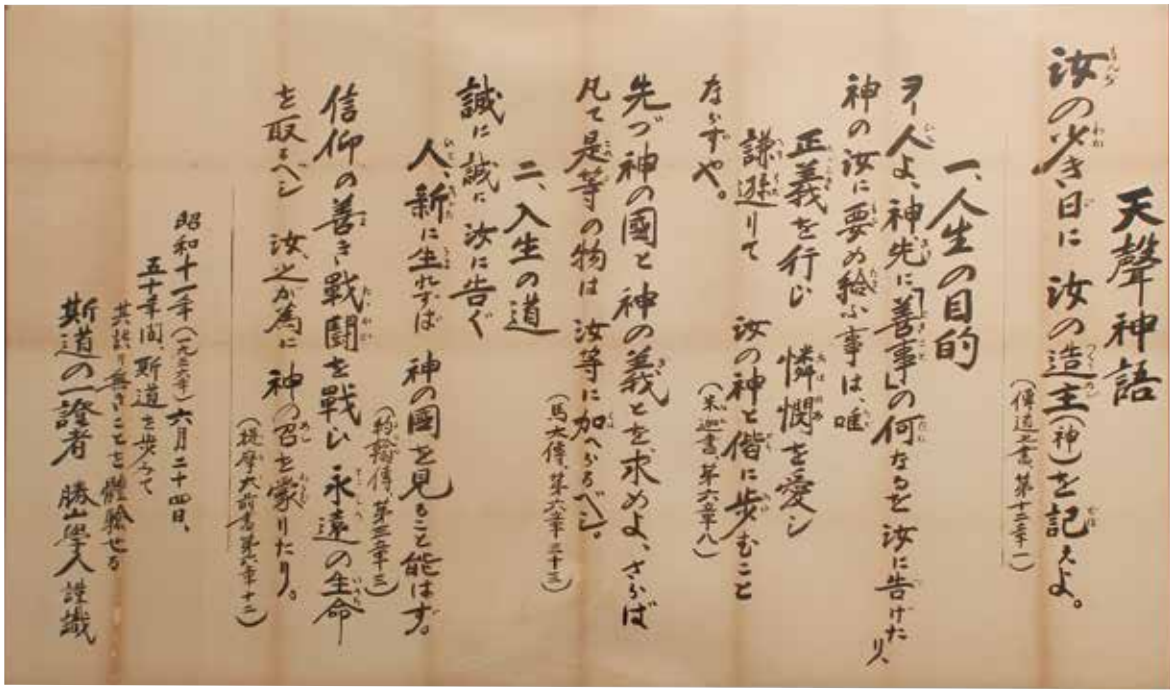
11.

円額

Chinese Poetry written on paper frame

1932（昭和 7）年／日本／波多野培根／紙・毛筆／西南学院史資料センター

資料 11 と資料 12 は波多野の直筆による格言が記された資料である。署名の「勝山學人」は波多野の雅号であり、波多野の先祖（波多野滋信）が勝山城の戦（1551〔天文 20〕年）において功を立て主君に殉じたという史実に由来している。



12.

墨書

Proverb written on paper

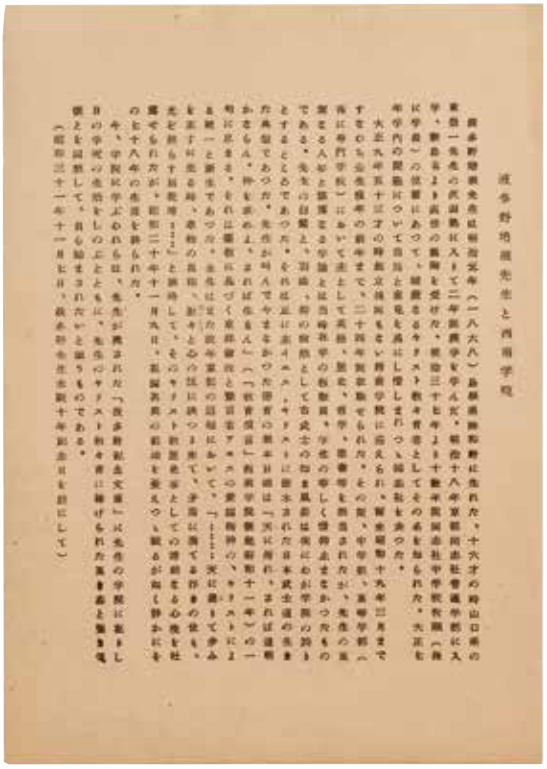
1936（昭和 11）年／日本／波多野培根／和紙・毛筆・額装／西南学院史資料センター

13.

波多野培根胸像

Bust of Hatano Masune

1990（平成２）年／日本／川村吾蔵作、山本文房堂復元／ブロンズ像／西南学院史資料センター



14.

波多野培根先生記念日の案内

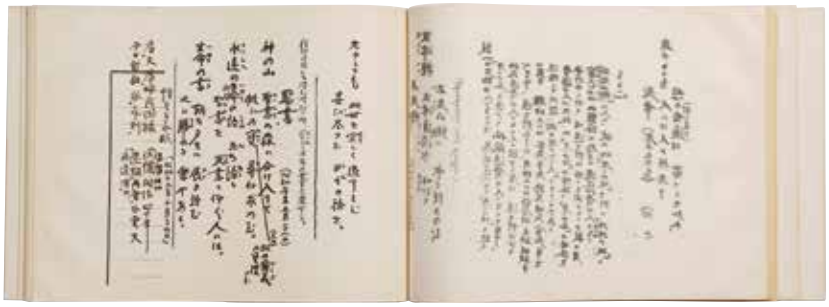
Invitation to “Anniversary of Hatano Masune”

1956（昭和 31）年／日本／西南学院／一紙／西南学院史資料センター

波多野培根先生記念日

西南学院大学の学年暦には、11月7日に「波多野培根先生記念日」という記念日が設けられている。この記念日は、1950（昭和25）年に波多野培根の功績を称えて設定されたもので、11月7日は波多野の没日である（なお、1958〔昭和33〕年までは11月8日が「波多野培根先生記念日」とされていた）。西南学院大学の学年暦における個人記念日は「C. K. ドージャー先生記念日」と「波多野培根先生記念日」だけであり、この事実からは西南学院の歴史において波多野培根という人物がどれだけ大きい存在であったかがうかがえよう。

没後70年あまりを経た現在、西南学院の学生・教職員たちが波多野培根という先人を意識する機会はほとんどなくなっている。それでも尚、西南学院の人々がこの偉大な教育者の存在を完全に忘却せず心に留めることができるのは、学院史資料センターに収蔵されている資料の数々、大学図書館の「波多野文庫」、そしてこの「波多野培根先生記念日」のおかげだろう。



15. **（上）**

故波多野培根遺稿

Posthumous manuscripts of Hatano Masune

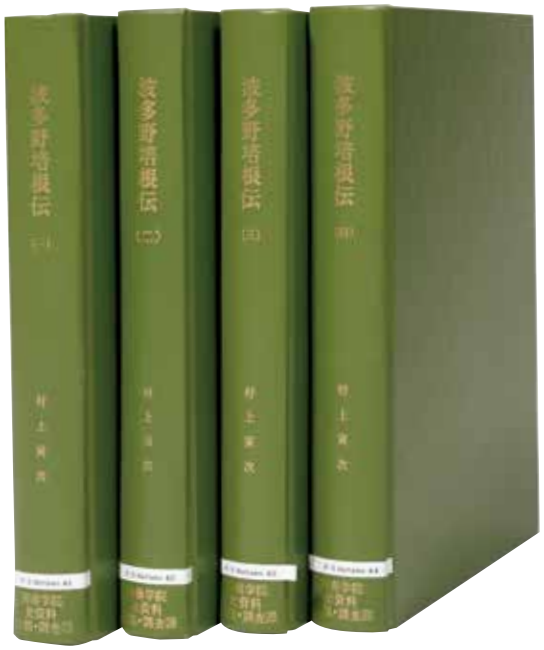
編纂年不詳／日本／波多野政雄編／書冊／
西南学院史資料センター

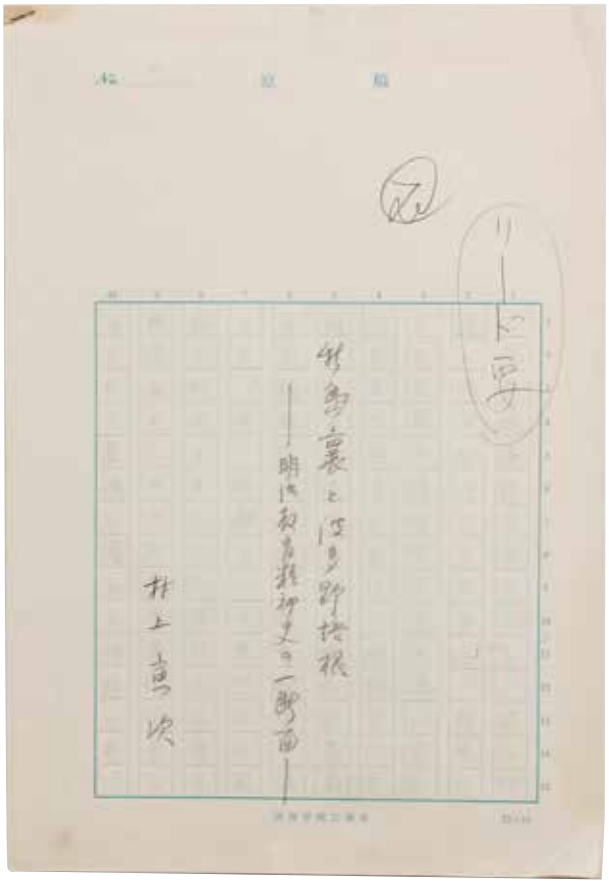
16. **（下）**

波多野培根二十年記念遺墨抄

Posthumous manuscripts of Hatano Masune(printed on 20th Anniversary)

1965（昭和 40）年／日本／写真・直筆原稿の写し（計 8 枚）／
西南学院史資料センター





17.

『波多野培根伝』稿本

Manuscript of *Biography of Hatano Masune*

執筆年不詳／日本／村上寅次／直筆原稿・書冊（全 4 冊）／西南学院史資料センター

18.

新島襄と波多野培根

Niijima Jo and Hatano Masune

1970（昭和 45）年／日本／村上寅次／直筆原稿／西南学院史資料センター

生前より学生の信頼が厚かった波多野は、死後も多くの教え子たちがその存在を記憶し、心に留め続けた。『忘れえぬ人々』（待晨堂、1971〔昭和 46〕年）で波多野の思い出を綴った伊藤祐之（いとうひろゆき）（元西南学院大学教授）、波多野培根研究に尽力し遺稿集『勝山餘籟』の刊行委員も務めた村上寅次（むらかみとらじ）（元西南学院大学教授・学長）らもまた、波多野の教え子であった。資料 17 および 18 は、村上寅次が波多野培根について著わした直筆原稿である。資料 17 は未刊行ながら現時点における波多野培根についての最も詳細かつ長大な研究書である。資料 18 は 1976（昭和 52）年の西南学院創立 60 周年記念の講演のために準備された原稿であると考えられる。

19.

日曜日問題の記事

Article on “Problem of Sunday”

1974（昭和 49）年／日本／西南学院／記事の写し／西南学院史資料センター

『西南学院大学広報』第 27 号（1974〔昭和 49〕年 2 月 6 日発行）に掲載された「日曜日問題」についての記事。西南学院史上最も大きな事件の一つである「日曜日問題」において波多野がどのような役割を果たしていたかが、当事西南学院大学の学生であった三串一士（みくしひとし）教授の口から語られている。

日曜日問題と波多野培根

「日曜日問題」とは、安息日の規定をめぐって1920年代後半に紛糾した西南学院史上の一大事件である。当時の西南学院では、主の安息日である日曜日にスポーツを行うことが禁止されており、運動部の学生たちは試合に参加することができなかった。そのため、学院の方針に不満を抱いていた学生たち（そして学生に同情を寄せた教員たち）とC. K. ドージャー院長との間に激しい軋轢が生じることとなった。この軋轢はやがて院長排斥運動に発展し、ドージャー院長は自らが創立した学院を去ることになってしまった。

資料19に記されているように、この事件において波多野が果たした役割は、学生と当局の間の橋渡し役であった。学院の要職を固辞し続けた波多野がこのような憎まれ役を引き受けたという事実は、波多野の人格を推し量るうえで重要である。「もしも学生たちが私のいうことをきかず失敗に終ったならば、即刻学院をやめて京都に引揚げる覚悟であった」と波多野は述べており、この言葉には、教え子の品川義介（しながわぎすけ）が「性来の硬骨病」と称した*波多野の気骨の強さがはっきりと現われている。

＊伊藤祐之『忘れえぬ人々』待晨堂、1971〔昭和46〕年、118頁

波多野培根略年表

年　代	年齢	月 日	事　項
1868（慶応4・明治元）年	1歳	6月20日（旧暦）	島根県（石見国）津和野藩士波多野達枝と咸（皆子）の長男として生まれる。家格は馬廻（または物頭）270石。当時，父達枝は藩校養老館儒学教師の一員であった。
1875（明治 8）年	8歳	2月19日	弟習農が生まれる。
1880（明治13）年	13歳	7月	父達枝が漢学私塾「淡水舎」を開設。
		12月	培根は津和野広小路小学校（下等・上等全科）を卒業。卒業後は，家庭において父から漢学を学ぶ。
1882（明治15）年	15歳	8月 3日	父達枝永眠。享年45歳。
		9月	培根は家督を継ぐ。
1883（明治16）年	16歳	9月	山口県（周防国）玖珂郡保津村の澤瀉塾に入門。 塾頭は陽明学者として著名な東崇一（澤瀉）。
1885（明治18）年	18歳	3月	澤瀉塾の閉鎖によって退塾する（在塾1年半）。
		9月	従兄増野悦興の勧めにより，京都同志社英学校に入学する。
		12月	新島襄，1年7か月の欧米巡遊を終えて同志社に帰る。
1886（明治19）年	19歳	6月20日	京都第二公会においてラーネッド博士により洗礼を受ける。 同級生久永機四郎・三輪源造・加藤延年も共に受洗した。
1887（明治20）年	20歳		母皆子・弟習農は，ともに津和野日本基督教会において洗礼を受ける。
1888（明治21）年	21歳	11月 7日	新島襄が「同志社大学設立の旨意」を全国20余の新聞・雑誌に発表する。
1890（明治23）年	23歳	1月23日	新島襄永眠。新島の遺言のうちに培根宛のものがあった。
		6月	培根は同志社普通学部を卒業する。
		9月 1日	同志社予備校の教員となる。
		10月30日	「教育勅語」発布。
1892（明治25）年	25歳	6月	伝道界に立つ決心を抱いて同志社を退職する。
		8月	山形県（羽後）酒田の伝道に従事する。
1893（明治26）年	26歳	12月	宮城県（陸前）涌谷町に移って伝道する。
1894（明治27）年	27歳	5月下旬～8月下旬	伝道会社の伝道計画の都合で仙台に滞在する。
		9月	福島県（磐城国）白河町に移る。
1895（明治28）年	28歳	3月	仙台の宮城教会主任伝道師に就任する。
		4月22日	丸山貞と結婚。
		6月	津和野から母と弟を呼び寄せる。
1896（明治29）年	29歳	12月	宮城教会を辞任，直接伝道界を退く。
1898（明治31）年	31歳	3月	仙台の尚絅女学校を退く。
		4月	北海道庁立函館尋常中学校教諭心得（英語）となる。
		11月25日	妻貞永眠。
1901（明治34）年	34歳	3月19日	藤田貞子と結婚。
		4月	奈良県畝傍中学校教諭心得（英語）となる。

年　代	年齢	月 日	事　項
1904（明治37）年	37歳	9月	同志社普通学校教師となって，京都に移る。英語・歴史・修身を担当する。
1905（明治38）年	38歳	8月	同志社普通学校教頭となる。
1909（明治42）年	42歳	11月 6日	長女英子が生まれる。
1917（大正 6）年	50歳	9月	中学長事務取扱となる。
1918（大正 7）年	51歳	1月 31日	同志社を退職。この年，いわゆる同志社紛擾の渦中にあった。
1919（大正 8）年	52歳	5月	独力で基督教文書活動を企図していたが，日本バプテスト西部組合の福音書館の応援を依頼される。
		9月～10月末	下関市壇ノ浦に仮寓する。
1920（大正 9）年	53歳	9月	福音書館主任の宣教師ウォーン師の紹介によって，福岡市の西南学院中学部の教師となる。
		10月	中学部寄宿舎に移り住む。
1921（大正10）年	54歳	4月	西南学院高等学部が開校され，その講師となる。
1927（昭和 2）年	60歳	4月	ドージャー院長から高等学部長に就任を懇請されたが辞退する。（4月 4日付書翰）。
1930（昭和 5）年	63歳	9月	中学部寄宿舎から高等学部寄宿舎（玄南寮）へ移居する。
1938（昭和13）年	71歳	3月	定年制により西南学院高等学部を退職。引き続いて嘱託講師となる。
		9月	島原の原城址を訪ねる。
		11月	「原城陥落の三百年紀」を『バプテスト』紙第102号に発表する。
1940（昭和15）年	73歳	1月	同志社から『新島先生の生涯の意義』が刊行される。
		4月	西南保姆学院が開設され，講師を兼任する。
1941（昭和16）年	74歳	5月 13日	西南学院創立 25周年記念祝賀晩餐会で「建学の精神」と題して講話する。
1942（昭和17）年	75歳	3月	西南学院高等学部の名誉教授の称号を受ける。
1943（昭和18）年	76歳	5月 30日	C. K. ドージャー院長永眠 10年記念日に当たって，「財宝を天に積め」と題して説教を行う。
1944（昭和19）年	77歳	3月	西南学院高等学部嘱託講師を退く。
		6月 3日	西南学院精神文化研究所開所式において，「基督と愛国」と題して記念講演を行う。
		8月 15日	福岡を離れて京都に移る。
		10月 26日	妻貞子永眠。
1945（昭和20）年	78歳	3月	鹿ケ谷の住居に移る。
		8月 15日	アジア・太平洋戦争終戦。
		11月 7日	培根永眠。
		11月 14日	同志社神学館講堂において同志社中学校葬。墓は，若王寺山頂，新島先生墓苑入口手前にある。

＊本年表は『勝山餘籟 波多野培根先生遺文集』（波多野培根先生遺文集刊行会，1977年）に掲載の「波多野培根先生略年譜」に基づき作成したものである。なお，掲載面の都合上，一部事項を省略している。

西南メモリアル・コラム①

11月7日は波多野培根先生記念日

11月7日は波多野培根先生記念日ですが、どのような功績があったかご存じでしょうか。

波多野先生は、1868〔慶応4・明治元〕年に津和野藩の儒学者の家に生まれ、18歳で同志社英学校に入学しました。そこで創立者新島襄に感化を受けてキリスト教に入信。卒業後、教育界、宗教界へ進み、校長として同志社普通学校（後の同志社中学）の発展に尽力しました。

その後、西南学院の理事であった宣教師E. N. ウァーンの紹介で、1920〔大正9〕年、創立後間もない西南学院中学部の教師として赴任。また翌年に開校した高等学部でも講師として教鞭を執りました。当時53歳でした。

いっさいの役職につかず、ひたすら学問研究と学生生徒の教育に、その生涯を捧げ、明治・大正・昭和三代を学問ひと筋に生きた碩学の人でした。

＊本記事は西南学院大学広報誌『Spirit』2008年秋号に掲載されたコラムを一部加筆修正したものです。

西南メモリアル・コラム②

真の愛国を問う――「基督と愛国」

波多野は、大学の前身である開設したばかりの高等学部の教師として哲学、倫理学、歴史学を教え、儒学思想と聖書の信仰に立つ古武士的教育者、思想家として学生・教員に多大な感化を与えました。

この時期は、日露戦争(1904〔明治37〕)年から第一次世界大戦(1914〔大正3〕)年、さらに日中戦争(1937〔昭和12〕)年、太平洋戦争(1941〔昭和16〕)年に至るまで日本が軍国主義に染まっていった時代でした。日本の教育が偏狭な独善的愛国教育に傾いていったとき、波多野の道義的歴史観に立つ愛国教育は、これと対立せざるを得なかったのです。そして1944〔昭和19〕年6月、西南学院精神文化研究所の開所式で「基督と愛国」と題した記念講演を行い、「自己の国家の利益のみを考えて他国を顧みない本能的愛国と、正義人道を標準とする道義的愛国」とを比較し、後者のみが国家を永遠の安泰に置くものと語りました。

＊本記事は西南学院大学広報誌『Spirit』2008年冬号に掲載されたコラムを一部加筆修正したものです。

西南メモリアル・コラム③

戦時下のキリスト教主義教育の拠りどころ

波多野は、講演した「基督と愛国」の写しを文部大臣以下、全国の主だった教育関係者に郵送することを望んでいましたが、実現しませんでした。

その後、憲兵隊や特高警察に監視されていたため学院に迷惑がかかるのを恐れて、1944〔昭和19〕年8月、京都の自宅へ戻りましたが、その翌年、11月7日に78歳で天に召されました。

中学部、高等学部で23年間（厳密には23年と7カ月）、ひたすらキリスト教主義教育に身を捧げた功績により1950〔昭和25〕年から学年暦の中に「波多野培根先生記念日」が設定されたのです。また蔵書（2,357冊）は、本学図書館に寄贈され、「波多野記念文庫」（波多野文庫）として設置されています。その後、薫陶を受けた教え子によって、1977〔昭和52〕年、遺稿集『勝山餘籟（しょうざんよらい）』が編集されました。

その生涯は、西南学院の学生、教職員にとって単なる教育者というだけなく、戦時下の厳しい状況の中、キリスト教主義教育の拠りどころでもあったのです。

＊本記事は西南学院大学広報誌『Spirit』2009年春号に掲載されたコラムを一部加筆修正したものです。

同志社と西南学院を繋ぐ
自校史研究としての波多野培根研究、その一つの展望

西南学院大学博物館学芸員　下園知弥

同志社と西南学院の繋がり？

同志社と西南学院。この二つの学校の繋がりを尋ねた時、人は何を思い浮かべるだろうか。両学校の名前を共に知っている人が真っ先に思い浮かべるのは、きっと「どちらもキリスト教主義の私立学校である」という共通点に違いない。そしておそらく、ほとんどの人は、それ以上の繋がりを両学校の間に見出すことはできないだろう。それは同志社や西南学院に所属する（所属していた）学生・教職員にしても同様である。というのも、同じキリスト教主義と言っても同志社と西南学院はルーツの異なる学校であり、歴史的に見ても（個人や学部学科単位はともかく）学校同士の積極的な交流はほとんど行われてこなかったからである。

同志社のルーツは、よく知られているように、アメリカで洗礼を受けてキリスト者となった日本人、新島襄が1875（明治9）年に京都に創立した同志社英学校である。同学校の創立・運営に際して新島襄が支援を受けていたのは、アメリカン・ボードと呼ばれる、プロテスタント諸宗派によって構成された宣教団体であった。なお、同志社とアメリカン・ボード（のちのUCBWM）の関係は財政問題や教育方針をめぐって一時対立があったものの、現在も交流は続いている。

他方で西南学院は、アメリカの南部バプテスト連盟の宣教師C. K. ドージャーが1916（大正5）年に福岡に創立した私立西南学院をルーツとしており、教派としてはプロテスタントのバプテスト派に属している。米国南部バプテスト連盟との交流は途絶えているものの、日本バプテスト連盟における神学者・牧師養成のための学校という役割を同学院は現在でも担い続けている。

以上のようなルーツ・教派の違い――さらには地理的な隔たり――を考えれば、むしろ学校同士の親密な交流が無い方が自然であり、事実その通りなのである。それゆえ、「同志社と西南学院の間には特筆すべき繋がりなど無い」という見解は妥当であるように思われる。

「波多野培根展」を通して見えてくるもの

では、同志社と西南学院の間には特筆すべき繋がりなど無いのだろうか。この問いに対する一つの回答が、本展示会「波多野培根――同志社と西南学院を支えた教育者」である。展示会タイトルからして明らかなように、企画者の意図するところは、波多野培根という教育者の存在を通じて同志社と西南学院の間に「特筆すべき繋がり」を見出し、提示することである。では、その「特筆すべき繋がり」とは、具体的には何なのだろうか。

企画者自身が本展示会を通じて見出したところによれば、同志社と西南学院の間には二つの大きな繋がりがある。第一の繋がりは、「教育」である。むろんそれは、「学校教育」や「キリスト教主義教育」のような曖昧な意味での教育ではく、波多野培根という一個人が伝え、後世に遺したところの教育である。より具体的な言い方をすれば、「波多野培根の教育的遺産」である。本展示会で示したように、波多野培根は同志社と西南学院で教鞭を執り、その教育を通じて多くの人々に影響を与えた。つまり、同志社と西南学院は、波多野培根という同じ教育者を得ることで、同じ教育を行い、同じ学識・思想を人々に伝えた学校なのである。

同じ教育とは言っても、一人の教員が在籍していただけではないか、という意見もあるだろう。しかし、波多野は非常に影響力のある教育者であり、さらに波多野の教え子が教育者となっているケースも少なくない（代表的には、品川義介、伊藤祐之、村上寅次、三串一士などである）。「波多野学派」と呼ぶのは大袈裟かもしれないが、しかし波多野が伝え、後の世代にも継承されていった「教育」という遺産は決して小さい枠には収まらず、同志社・西南学院の卒業生を中心として一つの大きなグループを形成しているのである。

第二の繋がりは、「自校史アーカイブ」の存在である。本展示会の展示資料のほとんどは、同志社社史資料センターおよび西南学院史資料センターが所蔵する自校史資料から出品された。この二つのセンターは共に、自校の記録を収集保存し、調査研究に資することを目的とする施設、すなわち自校史アーカイブである。このような自校史アーカイブが存在しなかったならば、自校史の調査は非常に困難であり、今回のような何十年も前に（同志社に至っては100年以上前に）在籍していた教員をテーマにした展示会を開くことも難しかったであろう。

「波多野培根展」は、両学校が充実したアーカイブを設置していたからこそ成立した企画であり、自校史アーカイブという施設の意義を企画者に改めて気付かせてくれた展示会となった。実際、波多野培根の関連資料のほとんどは両校の自校史アーカイブに収蔵されており、それゆえ両施設は波多野培根研究の二大拠点となっている。これが同志社と西南学院を繋ぐ第二の接点である。

自校史教育と自校史アーカイブ

自校史教育は近年多くの国公私立大学で試みられており、その意義も広く認められるようになってきている。自校史教育と言うと、日本に何千何万と存在する学校のうちのたった一校の歴史を学ぶという印象があり、非常にスケールの小さい話のように見える。しかしながら、自校史を知るということは、単に自校にまつわる出来事を知るだけではなく、自校と繋がりのあるさまざまな個人・団体の存在を知り、彼らの背景にある思想・理念を知るということでもある。したがって、自校史教育の内容は必然的に「自校の外」に開かれているのであり、その射程も日本史ないし世界史のスケールを持っている。

自校史教育に教材を提供するのは、むろん、自校史研究と自校史関連資料である。質の高い自校史教育を行う

ためには、質の高い自校史研究と資料収集活動が求められる。そして歴史の長い学校であればあるほど、必要な研究と資料は膨れ上がり、一資料室には収まりきれない量となる。そこで必然的に設置されるのが「自校史アーカイブ」という施設なのである。

したがって、現在では全国各地の大学で規模の大きな自校史アーカイブが設置されるようになっており、2004年に発足した同志社社史資料センター（写真1）や、2016年に開設された西南学院史資料センター（写真2）もまた、その流れの中で誕生した施設である（ただし、これらの施設は前身となった資料室が前世紀から存在している）。

自校史アーカイブが設置されるようになってきたこと自体は教育界全体にとって歓迎すべき流れであるが、現状では課題も多く存在する。そのうちの一つは、連携の不足である。日本における自校史アーカイブ全体に言えることであるが、規模の大きな自校史アーカイブが設立されるようになってきたものの、個々の施設の活動範囲は狭く、大学博物館のように他館と積極的に連携する体制は整っていない傾向にある。しかしながら、先に述べたように、自校史教育には日本史ないし世界史的なスケールが求められるのであり、その素材を提供する自校史研究もまた、同様のスケールが求められる。そのため、日本各地に存在する自校史アーカイブは今後、より積極的に連携事業を行う必要が出てくるであろう。そしてもし、同志社と西南学院が自校史関連事業で連携することがあるとすれば、そのテーマの一つはおそらく「波多野培根」になるであろう。

自校史研究としての波多野培根研究、今後の課題

波多野培根研究は、自校史研究という側面から考えれば、これまで深い関わりが認識されてこなかった二つのキリスト教主義学校を繋ぐという展望が期待されうる。とはいえ、波多野培根研究には現状多くの課題が存していることを指摘しておきたい。

課題のうちの一つは、研究者の不足である。波多野培根研究のピークは、おそらく1970年代前後、村上寅次らが牽引した遺稿集『勝山餘籟』編纂の時代であろう。以降は継続的に波多野培根研究に従事する研究者が現れておらず、21世紀に入ってからはわずか三編の論文が著されているに過ぎない（参考文献を参照）。その三編の執筆者がいずれも西南学院の教職員であったことを考えれば、波多野培根という人物およびその研究は全国的にはほとんど認知されていないというのが現状であろう。

さらに、関連資料の不足という課題もある。波多野培根関連資料は、同志社と西南学院にそれぞれ分散するかたちで保存されているが、時代に大きな偏りがある。両学校に教員として在籍していた時代は当然ながら資料が充実しており、波多野の思想の遍歴を詳細に辿ることができる。それに対して、両学校に在籍していない時代（たとえば日本各地の伝道に従事していた時代）に関しては、資料がほとんど遺されておらず、調査研究を行おうにもほとんど手がかりがないという状況である。

研究者と資料の不足は、波多野培根研究を停滞させている深刻な要因であるが、今後打破される見込みがないわけではない。同志社と西南学院には既に、充実した自校史アーカイブがあるからである。これらの自校史アーカイブが連携して積極的かつ継続的に調査を推進していけば、必ずや大きな成果に繋がるであろう。

参考文献

【資料集】
- 波多野培根先生遺文集刊行会編『勝山餘籟』、同会、1977年
- 同志社社史史料編集所編『同志社百年史』（通史編I–II・資料編I–II）、同志社、1979年
- 西南学院百年史編纂委員会編『西南学院百年史』（通史編・資料編）、西南学院、2019年

【論文】
- 湯川次義ほか「『自校史教育』に関する基盤的研究」、『早稲田教育評論』第24巻第1号、2010年、169–188頁
- 塩野和夫「村上寅次『波多野培根伝』の研究」、『西南学院大学国際文化論集』第27巻第1号、2012年、1–120頁
- 塩野和夫「村上寅次『波多野培根伝』（稿本）に見る波多野のキリスト教教育」、『西南学院大学国際文化論集』第29巻第2号、2015年、1–25頁
- 赤司友徳「第一次世界大戦下のある知識人の日記―波多野培根と大戦報道―」、『西南学院史紀要』第10号、2015年、35–44頁

写真1　啓明館（建物内に同志社社史資料センター）（同志社大学提供）

写真2　西南学院史資料センター

2021 年西南学院史資料センター企画展
「波多野培根　同志社と西南学院を支えた教育者」　出品目録

番号	資料名	制作年／制作地／制作・出版者／素材・形態	法量(縦×横cm) 器物は(縦×横×高cm)	所蔵
第1章「同志社と波多野培根」				
1	波多野培根宛遺言（新島八重等連署認書） *複製展示	1890年／日本／新島襄（代筆）／毛筆・和紙2枚・封筒付	27.1×39.2	同志社大学同志社社史資料センター
2	新島先生蔵書形見分書籍目録 *複製展示	執筆年不詳（1890〔明治23〕年以前）／日本／青木要吉（控）／和文・英文・毛筆・和紙11枚	26.0×19.0	同志社大学同志社社史資料センター
3	波多野培根旧蔵書 *Christian Dogmatics*	1874（明治7）年／イギリス／ハンス・ラッセン・マルテンセン著、T&T Clark／書冊	23.2×15.5	西南学院大学図書館（波多野文庫）
4	新島先生の生涯の意義	1940（昭和15）年／日本／波多野培根／印刷・洋紙・洋綴	19.0×13.0	西南学院史資料センター
5	同志社新報 第四十四号	1940（昭和15）年／日本／同志社／新聞	31.5×23.5	西南学院史資料センター
6	ラーネッド講述「羅馬書註釋」	1892（明治25）年／日本／D. W. ラーネッド著、福音社／書冊	19.3×14.0	西南学院大学図書館
7	『真道指針』	1893（明治26）年／日本／波多野培根著、大阪福音社／書冊	19.0×12.8	西南学院史資料センター
8	「韓国合併」非難の公開状	1910年／日本／波多野培根／巻子・桐箱付	28.5×260.0 本紙24.0×218.0	西南学院史資料センター
第2章「西南学院と波多野培根」				
9-1	波多野培根（53歳、着任当時）	1920（大正9）年／日本／西南学院／写真	7.2×10.4	西南学院史資料センター
9-2	波多野培根（73歳頃）	1940（昭和15）年頃／日本／西南学院／写真	14.0×9.5	西南学院史資料センター
9-3	授業前の祈祷	1925（大正14）年／日本／西南学院／写真	10.0×15.0	西南学院史資料センター
9-4	ドージャーが院長を辞任した年の 高等学部教員	1929（昭和4）年／日本／西南学院／写真	11.0×15.5	西南学院史資料センター
10	『無迹庵日誌』	1930–45（昭和5–20）年／日本／波多野培根／ 書冊（全4冊）	1–3巻 19.7×14.0 4巻 18.8×13.5	西南学院史資料センター
11	円額	1932（昭和7）年／日本／波多野培根／紙・毛筆	18.3×18.3	西南学院史資料センター
12	墨書	1936（昭和11）年／日本／波多野培根／和紙・ 毛筆・額装	74.0×123.5	西南学院史資料センター
13	波多野培根胸像	1983（昭和56）年／日本／川村吾蔵作、山本文房堂復元／ ブロンズ像	28.0×24.0×46.0	西南学院史資料センター
14	波多野培根記念日の案内	1956（昭和31）年／日本／西南学院／一紙	26.0×18.5	西南学院史資料センター
15	故波多野培根遺稿	編纂年不詳／日本／波多野政雄編／書冊	24.5×17.5	西南学院史資料センター
16	波多野培根二十年記念遺墨抄	1965（昭和40）年／日本／写真・直筆原稿の写し（計8枚）	各32.1×21.3	西南学院史資料センター
17	『波多野培根伝』稿本	執筆年不詳／日本／村上寅次／直筆原稿・書冊（全4冊）	各26.0×19.0	西南学院史資料センター
18	『新島襄と波多野培根』	1970（昭和45）年／日本／村上寅次／直筆原稿	25.6×17.6	西南学院史資料センター
19	日曜日問題の記事	1974（昭和49）年／日本／西南学院／記事の写し	38.3×27.0	西南学院史資料センター

2021年西南学院史資料センター企画展図録

波多野培根　同志社と西南学院を支えた教育者

監　　修　西南学院史資料センター事務室
編　　集　下園　知弥（西南学院大学博物館学芸員）
編集補助　内野　舞衣（西南学院大学博物館学芸調査員）
　　相江なぎさ（同）
発　　行　西南学院史資料センター
　　〒814-8511　福岡市早良区西新６丁目２番 92 号
　　TEL 092-823-3920
発 行 日　2021 年３月１日
印　　刷　株式会社 インテックス福岡

表 紙 図：「波多野培根（53 歳、着任当時）」（資料 9-1）
裏表紙図：「円額」（資料 11）

正誤表

５頁　資料４英題	（誤）The significant of the life of Niijima Jo	
	（正）The significance of the life of Niijima Jo	
14，15 頁　解説	（誤）伊藤裕之『忘れえぬ人々』（待晨堂、1971〔昭和 46〕年）	
	（正）伊藤裕之『忘れえぬ人々』（待晨堂、1968〔昭和 43〕年）	

西南学院史資料センター
西南学院

学校法人西南学院